

# 特集・子どもの文学この一年

## ★ 総論

### 打ち重なる語り

#### ― 児童文学の二〇一五年 ―

宮川 健郎

もうだいぶ以前になるが、「子どもの仮装」ということをいったことがある。

「後藤竜二は、子どもの話しことばで書いている。児童文学は、子どもを読者とする文学だけれど、大人である作者のものの考え方、感じ方は、子どもたちのそれとはちがう。後藤は、子ども読者とのあいだにあるへだたりをのりこえるために、子どもの話しことばを仮装し、子どもの認識と感受性の方へまわりこもうとする。これは、

児童文学にとってもっともラジカルな方法といえるが、『天使で大地はいっぱいだ』は、それを成功させた。」

（宮川健郎「日本児童文学のきのうときょう」『日本児童文学』一九八四年二月）

児童文学の作者が子ども読者とのあいだにある「へだたり」をこえるために、子どもの一人称、子どもの話しことばで書くことがある。現代作家のなかで、このやり方を自覚的にとりはじめたのは、後藤竜二だった。後藤は、デビュー作『天使で大地はいっぱいだ』（講談社 一九六七年）をこう書きはじめた。

「ついてないんだ。ぼくら六年三組の先生は、キリコになっちまったのさ。みんなが前からしんばいしてたんだ。なんだかそうなるような気がしてね。だけどほんとになっちまったんだ。」

「ぼく」といつているのは、主人公のサブこと森谷三郎、六年生。「キリコ」は木山霧子、新米の先生だ。サブは、彼のいう「さええない始業式」のことからはじめて、長編の物語を最後まで語りつづける。